

トラック 312_6

コモロにはライオンはいないが、物語やお話の中で我々は「悪い獣」と呼んでいる。でもここでは簡単にライオンと呼ぶことにする。

昔々、とても年を取ったライオンがいた。お腹が空いていたが、もう食べるものを何も見つけられなかった。というのもジャングルにいた動物を全部食べてしまったからである。動物たちはみんな彼のことを大変怖がり、食べられることを恐れて逃げてしまった。ライオンは、あっと言う間にひとりぼっちになってしまったことに気がついた。

ある日の午後、年を取って弱りきった彼は片隅に休みに行った。うとうとし始めた時に、我々がムベラと呼んでいる一羽の小鳥が飛んで行くのを見た。彼は小鳥に呼びかけた：

「ムベ、ムベラ、お前は私に挨拶するのに止まらないのか、私はお前の爺さんじゃないか！」
ムベラは答えた：

「あー、いい気味だ。あんたはここにいたみんなの手足をもいじったから！」

ライオンが答えた：

「それで何も食べるものがないことになってしまった。こっちへ来てくれ、私のために何か食べるものを探しに行ってくれないか。」

ムベラ：

「何を連れてくるようお望みですか？」.

ライオン：

「探してお前が見つけたものだ！」

ムベラはライオンのために食べるものを見つけに出かけた。出発すると、彼は跳ね回っているロバを見つけた。ムベラはロバに呼びかけた：

「ロバさん、ロバさん、王様があなたを探しに私を遣わしました。王様は政府を作り直されておられるところです。王様はあなたが加わることを望んでおられます。」

ロバは驚いて答えた：

「僕が？ もし王様が僕に入閣することをお望みなら、僕は外務大臣と財務大臣と国防大臣を要求するんだ！」

ムベラは感嘆の声をあげた：

「それこそ正に、王様があなたに与えようとお望みの大臣ポストですよ！」

ロバ：

「ほんと？」

ムベラ：

「勿論、王様は本当に私にそういいましたよ！」

ムベラはロバを、相変わらず弱りきっている王のところに連れていった。ムベラはライオンに知らせた：

「あなたが私に探すように言われた人物を連れて参りました。」

ライオンは力がなく衰弱して歩くこともままならないので、鳥はロバの方を向いて言った：「近くに寄りなさい。王様は、君が期待していることは小声で言うように望まれるだろう。だから君の頭を王様の口の中に入れ給え、彼は勅令に確実にサインされたいのだ！」。お人好しのロバはライオンの口の中に頭を入れた。「エ・ダー！！」ライオンはロバの頭をもぎ取った。ロバに止めを刺してからライオンはムベラに言った：「動物を食べる時、わしは最初に脳を食べて最後に肉を食べるのが好きなのだ」。

鳥は答えた：

「しかし王様、あなたは血塗れです。ご馳走を味わう前にきれいにされた方がよくはないかと？」。

ライオンは同意して、そこを立ち去り身を清めに行った。この間に鳥はロバの脳を引っ張りだしてそれを食べてしまった。

王は戻ってくると鳥に頼んだ：

「今すぐ脳を持ってきてくれ」。

鳥は答えた：

「ところが王様、ロバには脳がありません！ もし脳があれば、あなたの口の中にまっすぐ首を入れたりするのでしょうか？」